

第八章 十九世紀名著選

一 学界への質問

明治三十五年初頭の機関誌は、従来と全く面目を一新し、丸善そのものが一飛躍をしたような印象をあたえ、また実際においてその影響は、丸善の国内はおろか国際的信用を高めるに役立った。まず誌名からして「学の燈」を「学燈」に短縮し、表紙もこれまでの地球儀、続いて東京大学その他諸学校等の写真版による平凡なものでなく、若人の高らかに燈火を掲ぐる近代画にあらためた。長原止水の意匠になるもので、シャヴァンヌの「ラ ヴィジランス」の面影をつたえたものである。また裏表紙に GAKUTŌ JANUARY 1902 Z. P. MARUYA & Co., Ltd. とかいたのは、当時ドイツで評判の高いエックマンの筆意を模したもので、「雑報」欄にみずから「今の諸雑誌の表紙中に比ひなきもの」と誇っている。

内容もそれに応じて大改革をほどこして、日本における人類学の創始者で読書家の評判の高い坪井正五郎博士の「洋書談」(連載)と文壇の耆宿坪内雄蔵博士の「読書雑感」を巻頭においたのさえ、筆の立つ丸善店員の手習草紙から、一躍して最高級の執筆陣に飛躍した跡が歴然である。何より世を驚かしたのは、「十九世紀に於ける欧米の大著述に就ての諸家の答案(ABC順)」で、日本の文化界各方面の読書家七十余人を動員し、その意見をもって、



明治35年 「学燈」表紙

全冊の紙面の大半を埋めていることである。

これは、どこにもそう断ってなく、また丸善に何の云いつたえも残っていないが、内田魯庵の企画たること間違はなく、去年後半に入社した彼は、雌伏半年、おもむろに画策を練って、

「十九世紀に於ける學術文章の隆んなる誠に有史以来の一大壯觀にして巨篇名什の称あるもの二四五車も當ならず、道を学ばんとするものは万巻の書架に対して

却って頼る処を失ふ、譬へば岸頭に立つ者が怒濤の狂湧するを見て魂悸き氣勞れて、終に蛤珠珊瑚の波底に潜るるを知らざるに似たり」

という趣意書の冒頭からして魯庵以外にこんな文章をかく人はない。

「茲に於て弊社は業として書籍に親しむが故に偶々外国二三の雜誌社の顰に倣ふて広く博治の専門學者に質すに十九世紀及び其晩年の大著述を以てし、輯めて以て読書社会の針路たらしめんとす。」

というのは、西洋雜誌がそういうことをした先例があったものと見える。「牙籌」に専らなる「賈人」が自ら揣らざる生意気なことをしたと謙遜し、「ところが幸いに諸先生の容るる処となりて各々専門に由つて教を垂れ」この二十世紀の第二年を以て公表できるのは「弊社が誇つて光榮となす処、亦読書社会の益を為す少なからざるを信

ず」と今度は自慢をしているのも当然で、つまり大新聞か綜合雑誌がして当然なことを、彼等はぬかったのである。

「諸先生に願ふて教を乞ひし条項は即ち次の如し

(1) 文芸學術諸科學を通じて十九世紀中の最大著述

The greatest work in every department of science and literatures judged to represent the spirit of the Century.

(2) 最も興味ある詩賦小説等の傑作

Masterpieces in poetry and prose fiction.

(3) 讀書家の座右に備ふべき十九世紀の大著述

Works indispensable as conscientious reader's vade-mecum.

(4) 各専門の學術文芸に關する十九世紀の大著述

Master-works in your own special line.

(5) 十九世紀晩年の大著述

Master-works during the latter part of the 19th Century.

(6) 最も有名なる十九世紀史及十九世紀研究に最も必要なる參考書

Best histories for the Century and most important reference books for the study of the Century.

其他十九世紀中の有名なる樂曲及美術画譜等

And masterpieces in musical compositions or art-reproduction, etc.

ずいぶんむずかしい質問で、なおこれで見ると英語の説明も付け加えたもののようである。今のようになさくアンケートを求められる時代だったら、たいがいの人は相手にしないで、黙殺も多かったことと思うが、当時は人に礼儀があり、世の中もいくら暇だったろうし、みんなまじめに答えて、中には書名が二段組で二、三頁に及ぶものもある。

二 知識人総動員の偉観

この難問に答えたのは次の人々である。

安部磯雄、天野為之、有賀長雄、藤浪鑑、藤沢利喜太郎、五島清太郎、原田助、青木一郎、久松定弘、井上通泰、井上哲次郎、伊沢修二、石橋絢彦、石井亮一、伊藤篤太郎、岩田宙造、蟹江義丸、嘉納治五郎、勝島仙之助、岸上鎌吉、岸本能武太、畔柳都太郎、桑木厳翼、桑田熊三、増田藤之助、松本亦太郎、松村介石、松村任三、三並良、南鷹次郎、三島通良、三好学、三好普六郎、元良勇次郎、中村達太郎、野口保興、丘浅次郎、大瀬甚太郎、大森房吉、大塚保治、斉藤阿具、志賀重昂、島田三郎、杉山重義、高木友枝、高橋五郎、高橋是清、高橋作衛、高橋順次郎、高山林次郎、高安三郎、武信由太郎、田中稻城、田中喜一、田中遜、田中萃一郎、建部遯吾、徳富猪一郎、留岡幸助、戸水寛人、坪井九馬三、坪井正五郎、内村鑑三、浮田和民、浦井鍠一郎、上田敏、脇水鉄五郎、山田三良、柳沢保恵、海老名弾正、吉田覧龍、門野幾之進。

なお遅着して次の号にのつたのも何通かある。

福田徳三、樋口秀雄、葛岡信虎、大竹多気、佐久間信恭等がそうである。それらの解答(者)を専門別にするとの通りになる。

社会運動家、経済学者、国際法学者、病理学者、数学者、動物学者、教育家、ローマ法学者、旧藩主、医者、哲学者、工学家、植物学者、弁護士、柔道家、獣医学者、水産学者、英語学者、心理学者、牧師、農学者、衛生学者、造船学者、建築学者、進化論学者、地震学者、美学者、政治家、翻訳家、新聞記者、日本銀行副総裁、サンスクリット学者、雑誌記者、人類学者、文芸批評家、実業家

じつに各方面の人を網羅していると言わねばならない。思うにこれだけの各界第一級の読書人が、一堂に名をならべることとは決してあるまじく、学士会員の会議だって、この盛観には及ばぬであろう。ぬけている者といえ、軍人と女流名士だが、当時はおそらく女流が未だ多く重んぜられず、あるいはこれに答えるほどの女流読書家を発見するのに苦しんだのかも知れない。哲学者文士新聞記者には、工学や医学のことは分る筈がないし、その科学的専門家は文芸美術の知識がないから、これではまとまりようは無いように思えるが、そこはよくしたもので、おのずから共通点のはじきだされてきて、次のような結果をみた。

「学燈」三月号には、この結果をしめくくってこう云っている。

「本誌が七十有余氏の選定を請ふて掲げし十九世紀の大著述に就きては国民(新聞)及ジャパンタイムス両記者の精細なる批評(前号雑報参照)ありしが猶ほ編者が別に算当したる結果を挙げんに――

ダーウィンの『種源論』は三十二点、即ち最高票なり。之に次ぐはゲーテの『ファウスト』十六票なり、スペンサーの『綜合哲学』十五票なり（但しスペンサーは特にフォルスト・プリンシプルスを指名せし分をも算入す）。又之に次ぐはショーペンハワーの『デー・ウェルト・アルス・ウキレ・ウント・フォルステルング』十四票、コントの『クル・ド・フィロソフィー・ポジチヴ』十三票なり、續きてはセイニョボアの『現代歐洲史』とマルクスの『資本論』とが各八票、ユーゴの『哀史』とダーウィンの『デセント・オヴ・マン』とが各七票、ハルトマンの『無意識哲学』とヴントの『生理的心理学』とブルレの『近世史』とが各六票、オンケンの『アルゲマイネ・ゲジヒテ』及びヴントの『倫理学』及びラスキンの『近世画家論』及びトルストイの『アンナ・カレニナ』が各五票、又エンサイクロペヂヤにてはブリタニカは十一票を得、マイエルは五票を得たり、人を以て云へば数種の著書に対して十票以上を得たるものパIRON、カーライル、ハルトマン、ヘーゲル、ユーゴー及びミルの六家なり、スペンサーは惣て二十票、ヴントは二十四票、ダーウィンに到つては四十票を得たり、十九世紀の思想界に於ける第一の巨人がダーウィンたるは殆んど東西の一致する處、歴史上の定論と見て可なるべし、ジャバン・タイムス記者は寄稿者の多くが大学に属する為め独乙書に癖したりと云ひたれども斯く調べ上げて見れば矢張英国学者の著述を指名せしもの多く、近來独乙文学の著しく進歩したるに係らず日本学界は猶ほ英国學術の上に築かれたるを証明するに足るべし、（例へばエンサイクロペヂヤに於て見るもマイエルはブリタニカの半ばに過ぎざりし如きは最も適切の例なるべし）。文学書及び哲学書は読者の範圍最も広きが上に寄稿せられし諸大

家の大部分は其専門の学者なれば文学哲学に関する書名を多く見るは当然なれども『種源論』及び『ファウスト』の如きは恐らく何世紀の後に到るも十九世紀を説明するものとして第一に置かるゝものなるべし、又例へばマルクスの『資本論』の如き専門学者以外の選を得たるものは其点数は縦令多からざるも頗る価値ある得票なるが故に特に注意すべきものなるべし。

ジャバン・タイムス記者はステベンソン、ハーデイ、メレヂス、マークトウエイン等を指名するもの少く殊にキップリングを挙げしもの一人もなきを訝かりしが是等の作家は英米に重きを為すものなれども世界の思想界の於て公^{よう}麼の位置を作るものなるや疑ふべし、キップリングの如き殊に当今の寵児なれども我國の学者が雷同せざるは寧ろ其持重する所以を証するものと見て可なるべし。」

もし単に投票しただけだったら、せっかく花を咲かせながら、実を結ばせずに散らしたようなものだが、ダーウィンの「種源論」は英米の投票でも第一位を占め、わが推薦もそれと同じで、この書が十九世紀最大の著述にちがいない確証を得ると、丸善はなるべく多くこの書をわが読書界に普及したいと考えたが、如何んせん、定価二円で、青年読書子の購求するものとしては、少しく高価にすぎる。そこで発行所のジョン・マレイ社に交渉し、簡単な紙装本にして、日本国内の販売にかぎり、一冊定価五十銭の特別版をつくってもらった。その荷が初めて到着して、書籍の山が天井までとどいたのをみた時は、果してこのようにむづかしい専門書が如何に名著とは云え掘きつくせるかと店員一同、危惧の感を抱いたが、朝日にとける雪だるまの如く、みるみる小さくなり、無くなり、それから何回輸入しても忽ち消費しつくすので、しまいには出版元のジョン・マレイ社の方で、一たい日本というのはどん

な国かと驚いたという話が残っている。

さきにかかげた文章の筆者内田魯庵が、いまだ日露戦争の前で、大学の経済学教授も、ほとんど「資本論」というものを読まなかった早いころ、その票数は少いが、すこぶる価値ある得票だと結論し、又ジャバン・タイムスが英字新聞たる使命から、英国作家の得票が少いのを不満とし、殊に売り出しのキップリングを上げたものの絶無なるを指摘しているのに対し、わが読書界がイギリスの評判なんかに雷同しないのが、いいのだと云っているのは、共に見識である。魯庵は「資本論」を完読してはいなかった。しかしそれが占むべき位置は十分に認識していたのだ。彼はまたキップリングの愛読者で、晩年まで後進によくすすめた。而もジャバン・タイムスの批評を一蹴したのはよく物の軽重を知っていたからである。

のちに「丸善社史」は、この得票結果を、次のような表として掲げている。見るに便利だから、転載しておこう。

Darwin, Origin of Species. 種の起源

三十二票

Goethe, Faust. フォウスト

十六票

Spencer, A Systems of Synthetic Philosophy (但し First Principles. 第一原理をも算入)

綜合哲学大系

十五票

Schopenhauer, Die Welt als Wille und Vorstellung. 意志及び表象としての世界

十四票

Comte, Cours de Philosophie positive. 実証哲学講義

十三票

Encyclopaedia Britannica. 9th Ed. 大英百科全書

十一票

Seignobos, Histoire politique de l'Europe contemporaine (Political History of Europe since 1814)

現代歐洲史

八票

Marx, Das Kapital. 資本論

八票

Hugo, Les Misérables. 哀史

七票

Darwin, Descent of Man. 人間の進化

七票

Hartman, Philosophie des Unbewussten. 無意識哲学

六票

Wundt, Grundzuge der physiologischen Psychologie. 生理的心理学

六票

Bulle, Geschichte der neuesten Zeit. 近代史

六票

Oncken, Allgemeine Geschichte. 一般史

六票

Wundt, Ethik. 倫理学

五票

Ruskin, Modern Painters. 近世画家論

五票

Tolstoi, Anna Karenina. アнна・カレニナ

五票

Meyer, Konversation Lexikon. 大百科全書

五票

そして次号の「ゴシップ」という欄に、

(以下省略)

「十九世紀の大著述は英国でも米国でも選んだ。何処でも“Origin of Species”が一等になった。……独逸では無論ゲーテとヘーゲルで、就中『ファウスト』は世界の大傑作で不朽の価値がある。」

それからフランス、イタリア、ロシア、スカンジナビア諸国にわたって、当選したる人物を総覧し、

「日本の諸先生のお選びになったものも、凡そ大同小異である。左に右くゲエテ、ヘーゲル、ダーウィンの三人は十九世紀思想界の大立物であるに違ひない」

と、吾が読書水準が優に英米の星に迫っていることを言った。この筆者の名が、「陳列場の隅の善松」とあるのは、むろん魯庵である。

三 高山樗牛の批評

しかもこの企画が、国民新聞やジャパン・タイムスに載った批評より、更に注目をひいたのは、翌二月の「太陽」にのった高山樗牛の一文である。彼はいわゆる「スエズ以東第一の大雑誌」の文芸時評記者として、毎号筆をふるったが、言うところ流俗に反抗し、華麗の文の中にいささかバイロンの熱情を盛る。しかも去る一月二十日に文学博士になったばかりである。当時の博士は数も少なく非常な権威があったが、樗牛がその月桂冠を獲得したのは、まだ壮年三十二歳の時であるから、学位を受けた最年少である。されば天下青年の渴仰を一身に受けていた矢先きなので、彼の言説は、まさに二十世紀の世代の担い手たる若き年齢層に、この企画を注目せしめたことで、非常な効果があった。その樗牛の全文を掲げよう。

「去年の暮、丸善書店、現代知名の学者七十余人に托して十九世紀に於ける欧米の大著述に就いての答案を求め、載せて先月同店発行の学燈紙上にあり、試みに文芸に關して如何の書の推薦せられたるを見むか。

○最も興味ある詩賦小説として最も多く挙げられたるはゲーテの『フハウスト』なりき、是に次いてはバイロン、ユーゴー、テニソン、ワルズワース、カーライル、エマルソン等多数を占めたり、十九世紀の最大著述としてダルキンの『種の起源』を推したる点に於て諸学者殆ど其軌を一にしたるが如し。

○吾人の嗜好を以てすれば『フハウスト』は大詩篇たるに相違なきも、而かも余りに高大なるに過ぐ、吾人の感情が稀に人生の疑惑に觸れて異常の高調に達せし時に非れば、彼れは慰藉よりは寧ろ不安を与ふる也、吾人は「フハウスト」の大なるを是認す、然れども吾人自らの小なるを悲まざるを得ず。

○吾人は英国詩人の中には最もバイロンを好み、独逸詩人中には最もハイ子とキヨルネルとを好む、シレルは冥想の譏あれども思弁の癖を免れずゲーテは大にして即くべからず唯仰いで敬すべし。

○シヨーパーンハウエルがダルキンに次いで本邦学者の間に読まれたるは太だ吾人の意を得たり、シ氏の哲学は真なるよりは寧ろ美也、其の文章の如きは如何なる文学者の著述に対しても多く遜色あるものに非ず。

○シ氏の学説は其人物の如く甚しき矛盾に充つ、例ば美学上に於て絶対無上の価値を付与せられたる個人天才が倫理学に於ては一種の罪惡として其の個人的實在の根底たる意志の断滅を要求せられたるが如し更に倫理上意志の断滅を理想とせるシ氏自らの性格の如何に主我的個人的なりしかを觀よ。

○而かれども神ならぬ人の強めて其の稟生の矛盾を纏縫せむよりは寧ろ忌憚なくそを暴露したる所に却て天真

の美あり、吾人は是等一切の矛盾を包括したる、シヨールペンハウエル其人に於て一個の真人を見る。

○最近十年間の大著述の中にニイチエを挙げたるは井上大塚の二博士あるのみ、是れ吾人の意外とする所也。

○ニイチエの説の当否は暫らく措き、それが十九世紀文明の一大批評たることは争ふべからざる事実なり、彼の言ば或意義に於て旧世紀文明の崩壊を宣伝したるもの、是の意義を身読するは新時代の疑問を解決するに於て極めて須要の事なりとす、本邦の学者が皮相の識見を以て是の須要の事実を軽々しく看過せむとするが如きは、吾人の甚た取らざる所也。」

「美的生活論」を提唱して、しきりにニイチエ熱をあげつつあった樗牛が、ニイチエの得票の少いのを遺憾としたのは尤もだが、前記の「ゴシップ」には「この頃売り出しのニイチエは英米では評判が甚だ宜くない。怪しからぬ悪口を云ふものさえある」と報じている。わが国ではここに井上哲次郎、大塚保治、高山樗牛の三投票を獲得したのは、この時点に於てはむしろ出来すぎである。しかし高等学校、中学校の学生に投票したら、圧倒的に樗牛崇拜の多かった彼等は、樗牛の文でその名を知ったニイチエを選ぶものが大多数に上ったかも知れぬ。

四 世界的反響

この企画はただちに海外の注目をひき、二月十四日の「ロンドン・タイムス週報 (The Times Weekly)」に左の記事があらわれた。長文であり、今まで書いてきたことと重複するが、全文を訳載する。今までの丸善が海外に Maruya として知られたのは、単に商賈としてである。ここに至って広く文化的照明を浴びて初めて登場したわ

けである。タイムスは、今日も世界新聞界の王者である。しかし第一次大戦後のパリ講和会議以降、声価とみに低落し、昔日の面影はないが、この時のタイムスは *World Institution* の称をうけて、繁栄の絶頂にあった。それがこの年結ばれた日英同盟の親善を背景として論じたのである。

「極東における我が新同盟国が、長きにわたって英国文学の寛厚なる外護者でありそして近年日本が我が国書籍販売の外国市場としてまことに重要な地位を占めてきたことを知るのは、興味に富んだことである。日本の読書家は、わが出版界にとって最も望ましいお得意先きのようなものである。金銭のことは問題にならず、それが良書であれば、廉価版だろうが残品だろうが顧慮するところなく、直ちに彼等は買うのである。イギリスの出版社は、日本のある商社から、たとえば二ギニー（一ギニーは一ポンド一シリング）もする高価な本を一度に百冊からの注文を受けることも珍しくない。この商社はイギリスばかりか大陸の書籍も、さまざまなルートによって大量に日本に輸入している。この取次ぎのセンターは東京にあり、大学の学生たちが最も有力な読者である。問題のこの商社は丸善株式会社、ヨーロッパにはマルヤ会社として聞えており、最近ここで発行せられたカタログをみると、西洋文学という項下において、今日彼等がどんなものを読みつつあるかが分る。カタログののっている書籍は主として英語とドイツ語である。……ところでその機関誌の「学燈」は日本の各方面の学者に、十九世紀の代表的大著述と考える書物について質問を發した。それは次の六個条からなる。（これを略す）

それについて約八十名におよぶ学者の解答がのせられている。英国ははなはだ好意をもたれている。しかし

知半解なのを諷刺したつもりであろう。ところがこれは劇作家で稀にみる多読家の高安三郎（月郊）のあげた書と、英文記者の武信由太郎のあげた書とを、故意にか、あるいはローマ字綴りにして酷似しているため、同一人と混同して考えたのか、いずれにしても記者の甚しい思いちがいなのである。明治の有識日本人が、どうしてこの記事の並べたような“curious order”を作ろうか。

それは兎も角として、あの書選がタイムス・ウィークリーの記者の目にとまったのは、企画として成功であった。アメリカでは当時有力だった綜合雑誌の「ダイアル」が記事としたのは、主としてジャパン・タイムスによったもので、なお、クレメントの通俗にみえるが便利な好者の「日本手引」(E. W. Clement-Handbook of Modern Japan. Chicago, 1903) はさらに「ダイアル」から孫引きして、日本の読書傾向の説明として、これをのせている。さらに進んで、この影響はドイツにも現われ、「真理」(Die Wahrheit) という雑誌の第九号（実は三号）に、詳細なる評論がのっているという。不幸にしてその独原文を見ないのであるが礫川漁長という匿名氏が「十九世紀の大著述に就ての諸家の答案に対する独乙博士の批評」と題して、「学燈」八月号に寄稿している。ハース(Hans Haas)という博士の執筆で「その大意を訳す」といつているのに、二頁半を占めているのだから、現れた批評では、これが一番の長文である。

質問の七項目に答えるには、哲学、法学、医学、神学をまなんだ日本のファウストでなくてはならぬから、七項目全部に答えた者がなく、中にも最後の「有名なる楽曲及美術画譜」には二人が答えた外、他の七十余人はその無識を曝露したというのは、確かに当時の文化人の弱点で、出題者魯庵は、早くから名曲のレコードを買い、名画譜

を書架に積み、その方面に嗜好と蘊蓄があったから、この質問を発したのだが、一般の関心はまだそこまで及んでいなかった。「この（日本人の）無識は将来に迄も及ぶべきや」と云っているが、今はこの方面のペラ通は巷にあふれているを見たら、如何なる感想をなすだろう。

「この答案より見るも日本に於てはウニフェルザーレー・ビルツング（一般的教育）をなすの余暇なきを知るに足る。独乙の学問の尊重せらるるは第四問に対する答案中、其大概は独乙書なるによりて知るべく、吾人独乙人は特に誇るを得べし」

といいながら、一たいに優越的態度をとって、日本人がブロッホの「戦争論」や、ヘッケルの「世界の謎」、シュライエルマッヘルの「宗教論」などを挙げたのに、軽い冷嘲皮肉をあびせ、日本人は無形の思索に弱いといわれるがハルトマンの「形而上学史」が尊重され、ヴントはスペンサーと並ぶ声価を有していると指摘している。例によってジャバン・タイムスの指摘にならない、ハーデイ、メレディス、マーク・トエーンの英文学をあげる者の少ないことに言及し、キップリングは一票もないと、さもさも大欠陥のように言っているが、今日としてみれば、これを欠くのが当然で、彼が十九世紀の大文学として多数の票を得たら、後世に恥をのこすことになったであろう。ミュール・バッハの「ナポレオンとルイゼ女王」が一票を獲得しているのは、この論者と同じく吾等も意想の外であるが、これはドイツのアレキサンドル・デュマというべき作家で、万波重畳、読者を扑舞雀躍させる魅力がある。文学に無縁の学者がベルリン在学中、評判をきいて一読して面白さを忘れないでいて、一票を投じたと思えば、失当は失当でも、心事はわからぬことはない。ミュール・バッハの龐大なる全集は多く政治や戦乱の歴史物だが中に

「ゲーテとシラー」の一巻あり、この両文豪の交情を小説にして、やや識者に重んぜられている。

結語として言えば、旧世紀を送り、新世紀を迎える記念として、日本がなしたことで、最も世界的反響をよんだのは、丸善の提供したこの大著選であった。

五 魯庵の新着書紹介ぶり

「学燈」五月号に社告あり――

一、当「学燈」儀は本年以後全く編輯の組織を一変し、専らビブリオグラフィを主とし及ばずながら、読書界に貢献致す計画仕候処幸ひに江湖知名の諸博士及び諸大家の贊助を得たれば、当夏以後は益々奮って広く材料を蒐集して、追々と改良し、終には読書社会の好伴侶たらしめん事を期し候に就き、大方諸君は其徴志を汲んで御愛読を恭ふし、且つ御高教を賜はり度候」

新年来、誌面のあまりな大変革に面くらっていた読者は、ここで編集意図を初めて明確にせられて、なるほど、うなずいたのである。

それは新年号から歴然として、そうなっているので、「陳列場より 善六」という一欄が設けられ、十九世紀大著述の撰定を依頼したことなど、商人として出すぎた事だと謙遜に詫びながら、これを機会に、欧米の名著の教示にあずかれれば、いつでも掲載すると、誌面の解放を約束している。

それからは在庫品の吹聴で、今までのように書目を並べただけでなく、一々解説がついている。

セイニヨボーの「現代歐洲政治史」、ローレンス・ローエルの「歐洲大陸における政府と政党」、それから教科書用としてのシュイルの「ヨーロッパ近代史」(筆者は明治の末年早稲田の高等予科で、これを輪講につかった。十数種の教科書用近代史をとりよせ、専門諸家の意見をきいて、この書が最上ときまり、その輸入に力を入れることになったという解説をみて、なつかしさに感無量である)。ブロッホの「戦争論」(魯庵はこの本によつぽど感心して、晩年もよく話した)、ドモランの「アングロ・サクソンの優越性」と並べ来つて、こういうのがある。

「△ラインシュの“World Politics”も近来壮快なる好書に御座候。同書は近日帝國主義がナシヨナリズムに更替せし世界の大勢より説きて絶東の問題に及ぼし、殊に独乙及び米国の東洋の舞台に活動する所以を細叙したるは面白く候。殊に日本人に取りては此書が大隈伯爵又は人民新聞の言をオーソリチイとして引証したるが故に猶更面白く御座候、以上二書は近日某氏の手依て翻譯出づる風説聞及び候」

もちろん無数の輸入書を一々よむことは、いかに博読の魯庵といえども、人間わざでなし得べからざることであるが、海外から来る新刊案内の要領を摘録して報告する中に、時々こうして自分が実際に一過読した経験、感想を盛りこむので、乾燥なるべき記事の羅列が急に精彩をおびてくる。つづいてボーリューの「Tsar」、ヘルンの「ジャパニズ・ミセラニイ」、華族女学校の外人教師ベーコン女史の「日本の少女と婦人」と「日本の内面」、バウルゼンの「倫理大系」、ティヒネルの「心理学大綱」、ボウルドウィンの「哲学心理学辞書」などをあげ、それからエドモンド・ゴッスの「世界文学史叢書」がそろつて入荷したことを報じている。

これは古代ギリシヤ、イタリヤ、スペイン、ポヘミヤ、ロシヤ、サンスクリット、日本、支那をふくむので、こ

の記事はなканずくマレーイ教授の「古代ギリシャ文学史」、ダウデン教授の「フランス文学史」、マクドネル教授の「サンスクリット文学史」がイギリス評壇で好評を博していると報じているが、ワリゼウスキイの「ロシヤ文学史」もなかなかの好著で、ことにクロボトキン「ロシヤ文学の理想と現実」が刊行にならぬ前は、急に旺盛として興味を喚起してきたロシヤ文学のブーシュキン、ゴオゴリ、ツルゲエネフ、ドストエフスキイ、トルストイ、ゴリキイなどの知識を系統的に与えてくれる書は、この書以外にはなかった。

「右の中に『日本文学史』及び『支那文学史』有之候。此二つともに一年半前に輸入仕候故、日本に於ける批評も略ぼ定まり居候が、前者は日本に書記官となりて長く滞在せしアストン氏の著、後者は支那学者のオーソリテイとして中外に聞ゆるジャイルズ氏の著なれば、たとへ評論及び史的事実、及び和漢の詩賦文章の翻譯に、多少の誤謬有之候とも、日本支那ともシステマチックの文学史に乏しき折から中々に貴重すべきものと存じ候。此二書は独り英語国の珍とするのみならず、我が国学者及び漢学者諸先生もし一読し給わば、或は他山の石と可相成かとも存じ候」

この通りで、まだ日本文学史は三上参次、高津敏次郎共著の簡略不完全なものしか出ていなかった時、アストンのこの著が出て上田敏なども高く評価し、その門下芝野六助がこれを訳するに当っては序を与えている。

この書はヨーロッパ文化の知識を背景にし、社会状況や個々の作を、しばしば比較しているのので、比較文学の全盛を極むる目下のわが学壇には、とくに願みて再評価を加える必要がある。さきごろ太平洋戦争に、この筆者はマニラに従軍し、マッカーサーの退去後の書齋の、無数の典籍の中に、この一揃いが見出されたことは、当時新聞に

打電しておいた。

すすんでハイネマン出版の大教育家叢書のうちアリストートル、ロヨラ、ルッソー、コメニウス以下十人の伝記が到着したことを報じ、

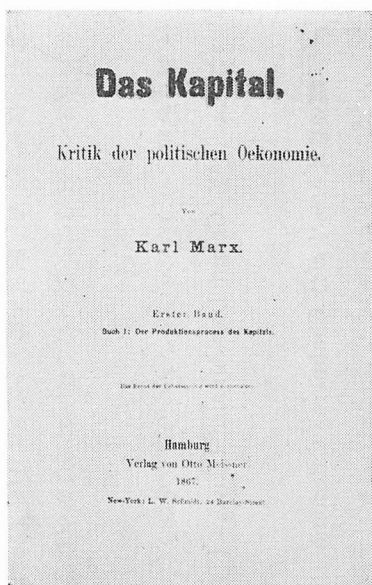
「△小説は唯今頗る欠乏致候。一週日前シエンキーウィツの『クオ・ヴァデイス』及びキップリングの『キム』を輸入し来り候えども、部数少なかりしたため僅に三日間に二著共に売尽して今や唯だ『輸入したり』と御吹聴申上ぐるだけに留るは深く遺憾に存じ候」

と云って、「キム」の内容を説いている。ノーベル賞が制定されてから、第三回目の文学賞を受けた「クオ・ヴァデイス」は、当時、日本でこの賞に何程の注意もはらわず、別にそのために売れた跡は全くない。この小説の評判が伝わってきた時、内村鑑三が米国の知人から贈られて、これを側近の佐藤迷羊に与え、「東京独立雑誌」にかいた一文が、この書を日本に紹介した最初である。しかもその頃は丸善にまだ入荷しておらず、高山樗牛は佐藤迷羊から借読して、「太陽」にその評論をかき、「小説もここに到れば歴史より確かなる事実也、哲学よりも賢き知識なり」と絶讃した。ちようどそこへこの「クオ・ヴァデイス」は入荷したらしい。

「隆々たる樗牛の盛名を慕う天下青年があらそうて購読し、丸善店頭、幾度輸入するも忽ち品切れとなる盛況を呈しぬ」

と、当時の清新なキリスト教の思想雑誌「新人」がつたえている。

次ぎにロンドンのワードロック社の Colonial Library が紹介され、「時事新報」に「モルモン奇譚」として連



K. Marx-*Das Kapital* 初版

載中のコナン・ドイルの原作や、ガイ・ブースビーがこの中にあると報じている。今は影をひそめて久しいが、このコロニヤル・ライブラリーもその廉価のために、わが読書界を恵福したもので、戦後西条八十が譏訳し、一部読者から異常な愛読をうけた「ドクター・ニコラ」は、もとの叢書で日本に入っただ。

次は転じて固い書籍にうつり、ファガッソンの「建築学史」、ラッツェルの「人類史」、ハックスレイの「サイアンティフィック・メモア」など、いずれも諸先生が、十九世紀の大著のなかに選抜したものと、付言するを忘れない。

「△独逸書にて唯今持合せたる大著述と申すべき内マルクスの“*Das Kapital*”クノー・フィッセルの“*Geschichte der neueren Philosophie*”等十数書有之候が之は次号に於て御吹聴可仕候」

じつは平民社の幸徳秋水、堺枯川も、日露戦争の時「共産党宣言」を訳したのが、マルクスを直接に手がけた始めて、「資本論」はアナキストとなった秋水は読んだ形跡なく、枯川がこれを読んだのは日露戦争後だと自白している。しかしアメリカで社会主義を知った片山潜はこれを読んでいたようだし、安部磯雄は十九世紀の大著述でこれをあげている。しかも解答者の姓名のアルファベット順に掲載したので、安部磯雄の

あげた「資本論」は、劈頭に載っている。この一、二年前から丸善の目録には「資本論」が見えており、つまりこの書を逸早く丸善が取り扱ったのは、日本の多くの社会主義者等が、その必読の重要大著なるに気づく前からである。

大部の参考書として、よく知られているマイエル、ブリタニカの外、ブロックハウスの *Conversationslexikon* およびラルースの *Grand Dictionnaire Universel* の持合せがあるといい、更に次のような珍書の在庫も告げている。

「最も奇品とすべきは Chalmers: Caledonia に御座候。チャルマーの名が此「カレドニヤ」の著を以て不朽となりしは文学史を読まれし方の夙に御承知相成る事と存じ候、此書の初版は千八百七年より二十四年に到る十数年を費して、僅に其半分を出版して中絶したるを近く好書癖家一般の惜む処となりて、其残稿と共に併せて僅に数十部を千八百八十七年より九十四年まで七年を費して再版仕り候。弊店持合せの品は即ち此再版の一部に御座候へば、誠に世界に類ひ少き奇品と存じ候。「カレドニヤ」とは北英即ち蘇格蘭の風土記にして、最古より現代に到るまでの歴史風俗人情を最も精かに伝へたるものに御座候。全部七巻、歴史家及び地理学者の必ず其書庫中に納むべき大宝典と存じ候」

というに到っては、魯庵の奇観書癖の一端が現れている。後には丸善は、世界に数部しか現存せぬ切支丹版の珍書など取寄せ、売られなければ秘宝として倉庫に積んでおく余裕を生じたが、これはそうした傾向の先驅をなすものであろう。

「△又恰も所蔵致し候ギグ氏著述の“Musical Instruments”(樂器譜)は恐らく美の極粹を尽したるものと存じ候。羊皮の装釘の高雅なるに搗てて加へて五十枚の着色挿絵の美はしさ真に印刷雕刻の技術の精を尽したる極みに御座候。我が『国華』其他の着色板美術画の如き、之に比べては遠く及ばず候」

という一節が終結である。以上、長きを厭わず、間々原文のままを引用して、紹介したのは、これから毎号つづく「陳列場より」が如何なるものであるかの説明に換えたので、併せて当時、丸善のあつかった書物がどんなものであったか、一斑をうかがう便宜もある。

しかも吹聴は以上にとどまらず、欄をかえて「營業案内」十五頁をもう一度見よう。これには

Encyclopaedia Britannica (大英百科字典 二十五冊)

Meyer's Conversationslexikon (マイヘル百科字典 二十冊)

Chamber's Encyclopaedia (チェンバー百科辞典)

The Century Dictionary and Cyclopaedia (センチュリイ大字典 十冊)

を劈頭におき、以下 Webster's International Dictionary (25000 Additional Words) ウェブスター万国大辞典(最新版二万五千語増加)をはじめ、十数種の辞書、地図の書名をのせ、一段乃至、三、四段の紹介をつけている。

六 トルストイの「復活」

話は横道にそれるが、昭和四十一年近代文学館の開館を記念してトルストイ展覧会が「朝日新聞」と共同で企画され、本国のソヴィエト連邦からは、トルストイ博物館の重要遺品をつくして、送ってくるという大規模なものとなって、こちらでもそれに応じ、トルストイ移入と伝播の歴史に沿うて徹底的に品物をあつめる事になった。原案はだいたい、若きロシア文学の専攻家たちによって作られ、その上でこの筆者も諮問をうけて、若干、補足の進言をしたが、その中でこう言った。

「これには『学燈』の貢献にたいして一顧もはらってない。日清戦争をめぐる前後数年、もっともトルストイ紹介につくしたのは『国民之友』と『国民新聞』で、日露戦争の前後十年、これに代ったのが『学燈』である。商社の宣伝誌にはちがいないが、その埒をのりこえて、トルストイの記事を多くかけ、その宣揚には大変効果をあげた。よろしく丸善からも出品を乞うべきである」

これは直ちに委員の容るる所となって、その展覧会には「学燈」その他が出品せられた。しかし苦心の作製の目録をみると、「学燈」への言及はほとんど無い。当事者に十分の認識が欠けていたことがわかる。

民友社は徳富蘇峰、蘆花の兄弟ともにトルストイへの関心が深く、十年の時をへだててではあるが、共にははるどとヤースナヤ・ポリャーナの村莊に、このムジーク聖者の老翁をたずね、又その前に、トルストイに師事して、「老子」をロシア文に共訳した小西増太郎の帰朝を逸早く知って彼の寄稿を乞うている。

丸善は商社だから、むろん、徳富兄弟の如くトルストイを訪問し、蘆花の如く晴耕雨読のトルストイヤンとしての生活を実行するほどの帰依や尊崇はない。ここでは博識の内田魯庵が、しばらくその関心をトルストイに集注し、丸善にいて欧米の出版事情が手にとるように響いてくるのを利用し、トルストイの新作はもちろん、その一挙一動の話題もニュースの新鮮味をもって報道した。つまり従来のトルストイを訳し、伝えるものは、過去の文学史的事跡として取扱ったのが大部分であったが、魯庵にいたって、トルストイは同時代に呼吸している文豪との現実感をもって、一種のニュースとして脈搏にさわるように、伝えられてきたのである。

いったい、丸善でいつごろからトルストイを輸入したか、明確にわからない。ドストエフスキイの「罪と罰」が明治二十三年に店頭にならんでいたことは、明瞭であるから、恐らくそれと前後して、トルストイも入っていたであろう。明治三十年代に入ると、「学の燈」の巻末の広告欄の洋書リストの中に、トルストイの作の見えること再三に及ぶが、他書並みの小さな活字で、十把ひとからげに扱われており、別に特別待遇は受けておらぬ。

「学燈」二月号の「陳列場より 善六」の中に

「小説は余り多く新着不仕候。併しながら……些か御吹聴する値ひ有之候は左の三著に御座候

Tolstoi: Resurrection

Sienkiewicz: Quo Vadis

Gorky: Orloff

前二著は既に屢々輸入仕候品に有之候へどもゴルキイの著は之を以て初めと致し候。……トルストイの『リ

『ザ・レクシオン』に到つては蓋し此翁近業中の大著述、『クロイツェロア・ソナタ』如きものの比に無之候」とあるのは、文は簡単であるが、注目せねばならぬ記事である。

「リザ・レクシオン（復活）」は、去年明治三十四年に刊行を見、年末にはルイズ・モードの英訳がロンドンで刊行せられた。ロシヤ文では、この作がもと雑誌「ニール」に連載中、ペテルスブルグに大使館付武官として駐在した広瀬武夫が読んでゐる。また伊藤博文は日露協商の締結に露都におもむいて望みを達せず、そのうちに日英同盟締結の報に接し、不満のうちに物惶としてロンドンに引きあげた。その時、「復活」の英訳が出来て大評判になつてゐるので、かねてロシヤ滞在中から耳にしていた事であり、購求して帰航の船の中で読んだ。それがこの年（明治三十五年）の一月と伝えられている。しかしこの英訳は意外に早く日本に輸入されており、伊藤が横浜に出迎えた徳富蘇峰に、「復活」の話をすると、蘇峰もすでに入手して読んでいたというから、一月にはもう丸善店頭に並んだことがわかる。その後再三輸入されたと言っても、一月号の「学燈」には広告もそれへの言及も見えぬところから推して、一月一日発行の雑誌に、のせるには間に合わなかったのだ。さらに五月号の「陳列場より 善六」に、

「△トルストイの“Resurrection”も更に又到着仕候。『レザ・レクシオン』が『アンナ・カレニナ』以後の傑作たるのみならず最近歐洲文壇の巨観たるは特に歎々の弁を待たず候。且つ本書は従来屢々舶載仕り候へども此度は最廉の仮綴物到着仕り候」

とある。その翌六月から、「もしほ草」という欄に「馬鹿者イワン」の訳が連載され始めた。訳者名はないが、も

ちろん魯庵で、数号かさねても未完に終ったが、のちにまとめて「イワンの馬鹿」と改題して発行した。その寄贈をうけて夏目漱石が「イワンの馬鹿にはなつて見たく候」と返書している本である。

七 フリー・エイジ・プレス

ここで暫く「復活」をはなねねばならぬ。というのは、「学燈」七月号にチュルトコフ企画イギリスのクライスト・チャーチ発行の、全十五巻からなるトルストイ全集の記事がのっているからである。第一巻は「懺悔」の予定で、この書に対するトルストイ自身の註解、書翰など、これまで刊行されなかったもののものをせる予定と報ぜられている。

いったいトルストイのロシア原文は、多くが当局の忌諱に触れ、ひどいのは絶版もしくは刊行不許可だが、そうでないのも、過半は検閲で削除を命ぜられて、不完全である。外国語訳はこの不完全なものに基づいた上、誤訳、真意の誤解が多いから、それでイギリスでなら絶版物、発行不能のものも自由に出せるし、削除部分も還元できるというので考えられたのがこの出版企画だ。その実行者はチュルトコフである。

これは貴族で、途中から宮廷にそむいて深くトルストイに帰依し、夫人の妹はトルストイの息子と結婚して、姻戚関係にある。トルストイの信任は絶対で、原稿ができれば、先ずチュルトコフに示し、未完原稿も、日記書翰も、みなその管理を托されていた。

この時より十五年前、チュルトコフはモスクワにボレスドニツクという出版会社をおこし、これも貴族で海軍士



トルストイ・小西共訳「老子」

ので、ついにここでトルストイの著作を出版することは一さい禁じてしまった。(もっともそれ以外の著作は出したので、たとえば小西増太郎との共訳「老子」などは、このボレスドニツクから出版された)

チュエルトコフは、むしろ外国へ移住して、この仕事を続行しようかと考えているうちに、はからずもドウホポール教徒事件(あとで詳説する)がもち上り、トルストイが教徒の非戦主義と、悪乃至暴力に対する無抵抗の教条に、心から同感して、教徒を迫害虐殺するロシア政治の無道を世界に訴えたので、ロシア皇帝の激怒を買ったが、しかしトルストイには一指も触れ得ないものの、チュエルトコフはじめ、トルストイの門下ともいべき者は、みんなロシアから追放したので、ロンドン郊外のクライスト・チャーチに居を占め、同志のロシア人十五名を糾合して、出版業を始めた。はじめはダイナマイトを製造しているのではないかと疑って、しばらくイギリス官憲も目を光らしたものである。

官だったのをやめてトルストイの側近となったビリュコフと共同監理して、トルストイの著作を出版した。トルストイ主義の宣伝が目的だから前後に比類のない廉価で、たとえば五錢、三錢、二錢、一錢、はなはだしきはトラクトなどは五厘というのも珍しくなかった。たちまち羽翼を生じて、トルストイの著作がロシア全土にひろがるので、ロシア政府は様々な陰險な手段をもちいて妨害したが、一こうにききめが無い

チュルトコフは亡命にあたり、未刊のトルストイの原稿をおびた大きく携帯してきたというので、各方面から多
大の金額をもって譲渡を交渉してきたが、もともとトルストイ主義を奉じ、その小植民地をつくって、そこから世
界の隅々まで宣伝をしようというのだから、金銭に耳をかす筈がない。

ただ全集は、準備に時間もかかるというので、小冊子から出版を始め、縦長の菊半截判で緑色表紙のものを実に
無数に刊行して、これを Free Age Press と称したのである。トルストイの小篇で、執筆したとの噂はきこえな
がら、どの全集にも叢書にも公表されていない多くの珍篇が、この叢書においてのみ得られる。しかもその訳者は、
ロシヤに久しくトルストイに師事したモードやケンウオシイなので、これ以上の英訳はできるあてが無いから、忽
ちにして世界に声価を博した。

魯庵もただちに、この仕事に目をとめ、早速注文を發したが、一向に來ない。やっぱり特殊な出版だから入手が
困難なのかなども考えて、あきらめかけていた。

ある日丸善へ出勤して、荷物倉にいてみると、青年店員たちが、幾つも海外からとどいた本箱の留め金をはず
し、中から小さなパンフレットやトラクトを取り出しては、投げずてるようにしている。

「それは一たい何だ」
と聞くと

「本のすき間に、今度はこんな物を詰めて來たんです」
という。魯庵が何気なく手に取ってみて忽ち叫んだ。

「こりゃあフリー・エイジ・プレスだ。こないだから到着を心まちにしていたものだ。もっと来とらんか」

「あっちに沢山ついています、何かのまちがいで送って来たので、こんな物売り物にもならんと思って、箱のまま積んであります」

そこで二階に陳列すると緑色の洪水のような盛観を呈したが、トルストイの論文や民話や感想が五銭か十銭で買える。高きも三十銭を出でないので、売れるわ、売れるわ、何度追加をしても、すぐ品切れになった。日本にトルストイを広めたこと、このフリー・エイジの廉価出版が第一だろうと魯庵はよく話していた。

八月号の「陳列場聞書 小僧の一人筆記」は、新著書を買いに来た、甲乙丙丁戊己の紳士、甲乙丙文士、その他新聞記者、批評家、美術記者、貴婦人の問答を聞き書きした態になっていて、その中の丙紳士がこう言っている。

「君の処じゃ、トルストイ宗になったのじゃあるまいな、いやにトルストイが沢山くるじゃないか。あッまた“On Life”（人生論）、“What I believe”（わが宗教）なんて奴がきたな、レサーレクシヨンは売れたかい。

売れた！ 流行は恐いもんだな“Anna Karenina”は来てゐるかい。来ている。感心。買って行くよ。我輩はアンナ・カレニナを三度買う。買ってはすぐ貸し失くして、そのくせまだ読まないのだ。此の緑い表紙のパンフレットは何しろ廉くて妙だ。我輩は余り廉いから度々買出しては書生に呉れてやる。トルストイに頼まれなければいけないが。此頃の日本の下らないものを見るより面白くもあるし、幾分か精神上の肥料になる。今日も買って行く。取交せて二十冊も貰ってゆくかな。“On Life”は三冊買ってゆくよ」

この緑い表紙のパンフレットこそ、別に名を上げてないがフリー・エイジ・プレスである。明治三十五年から、

第一次世界大戦の終わったころまで、約十五年にわたって、これは丸善にきていた。この筆者は、第一次大戦中兵に徴集されて、朝鮮の南原の守備につけられている時、アメリカの婦人宣教師から贈られて、フリー・エイジの *What I believe* をよみ、ギリシャ語の引用など、わからない所も多かったが、元来、考証的なことが好きなので、感興おく能わず、再読、三読した。一冊三十銭ぐらいであったとおぼえる。但しこの話に出ている「アンナ・カレニナ」は大冊なので、フリー・エイジ・プレスには入っていなかったと思う。この紳士は別な叢書を買って行ったことになる。

八 ドウホボール教徒

魯庵が丸善に入り、「学燈」の編集にたずさわるようになってからは、誌面独裁であり、そして八面六臂で、全紙面、新着書の解説から、広告、店の挨拶まで一人で書きまくっている。

「建言して用いられざるなしというほど、店主から全幹部の信用を博した」とよく云っていた。

しかし最大の功績は、トルストイの紹介、伝播で、そのトルストイも彼が関心の焦点としたのは新刊早々の「復活」と、それからフリー・エイジ・プレスの発見普及、そして一つはドウホボール教徒事件である。

じつはドウホボール教徒のことを初めて雑誌にのせたのは魯庵でなく、反省雑誌（中央公論の前身）や、内村鑑三の「東京独立雑誌」に早くから一、二散見した。しかしそれは向うの雑誌の断片的な記事の不完全な翻訳で、只

めずらしいから載せてみたというに留まる。そこへゆくと高山樗牛はさすがで、数行の記事をかいているだけだが、その意義はつかんでいようだ。

魯庵が、この教徒に着目したのは、それらにおくれた。「復活」が刊行され、それはこのドウホポールを救済して、ロシアからカナダに移住させる資金をつくるために、久々に著作したという事実が、はじめて魯庵の注目をひいたのである。単なる宗教問題にとどまったら彼は大きく興味をもたなかったのだ。

ドウホポール教徒とは、カフカース（コーカサス）地方を中心に発生した小さな土俗宗教団体で、最盛時でも信徒は四万をこえない。

彼等は聖書の殺すなかれ、悪に報ふるに悪を以てするなかれを単純に信条として生きる勤勉で、無知で、純朴な教徒なのである。しかし徴兵を殺人の訓練だといって忌避するばかりか、しまいにはカフカースの山地では狼や熊、又ダッタンやトルコの異人種との接触にぜひ必要な個人用の銃から、人によっては鍬や鎌の農具まで、殺人器になるおそれがあるというので、近郷近村呼びつどい、大量にあつめて焼却してしまった。

また国家組織も政治も偉大なる暴力として、村長その他の地方指導者に指命されても受けず、又それを支える納税もこばみ、只自分だけの集団で平和に且つ静穏にくらいたいというのが念願である。当然、専制の厳酷な帝政ロシア政府は、山奥で秘密に二千人からの大量虐殺をおこなっても、彼等は少しもひるまない。困うじ果てて、ウラルの山奥に移住を命じた。磽确不毛の地だから農具がなくては開拓できず、したがって飢えるか、あるいは銃をもたぬから狼や熊にくわれて死んでしまふだろうという目算だったが、彼等は大方こびで、そこを開拓し、麦や

野菜をうえて、彼等だけの樂土をつくった。各地に散在する教徒がその噂をきいて、だんだんに集ってきて村は大繁昌である。

政府はすておけずとして、コサック騎兵を派遣して討伐させようとしたが、部隊が現地に到着してみると、どの家でもテーブルに織り立ての真新しいクローズをかけ、その上に焼き立てのパンと水をいれたフラスコがおいである。

「何のまねだ」ときくと

「あなた方は折角、何百露里の遠いところを馬で来られたので、さぞお疲れと思い、粗末ながら用意しておきました」という。

コサック騎兵は感激して、銃剣をすててドウホボールに改宗したというような事跡もあるのだ。

たまたま、地方新聞の小さな記事から、トルストイがこれを知り、真疑を確めるために、海軍上りの青年貴族で、トルストイの心服者なるビリュコフを派遣して、真相をさぐらせると、その迫害の惨虐さは想像にも絶するものであると共に、その生活はトルストイの「悪にたいする無抵抗」そのものであることがわかった。トルストイは、人生かくあるべきものとして自分の信条を発表したが、その「無抵抗主義」(non-resistance)が実践可能かどうかには確信ももてなかったところ、いま現実に日々その生活を送っている団体のある確証を得、それから徒刑囚としてシベリヤに送られる教徒が途中モスクワの牢獄に繋留されているのを自ら訪ねて話をきき、ドウホボールの主長ピョートル・ヴェリギンがシベリヤに流刑されているのとも書信を往復して、この教徒の信じ、行うところが偽せ物

でないことを知るとともに、イギリスの有力紙デユリー・テレグラフ紙に寄書して、二十世紀初頭まるで中世紀の宗教裁判にもまさる野蛮な迫害が行われていることを世界に訴えて、与論を喚起した。ニコライ二世皇帝が激怒し、トルストイを直接処分しては、世界の反撃をうけて却って藪蛇になるから、側近のチュルトコフやビリュコフを追放したのはこの時である。

ドウホボールにも追放命令を発し、カナダが引きうけようと申出てくれたが、彼等には大集団でそこに移る船賃もなく、いわんや移住地に家を建て、耕作地を求め、農業をいとなむ費用など、全くない。しかしトルストイの訴えで、英米のクエーカー教徒が、その教義の著しく酷似するところから（事実ドウホボールはクエーカーから派生したとも云われている）、多額の寄付金をあつめて贈り、フランス、スペイン、オランダその他の国からも、有志の義捐金があったが、もちろん、それだけでは不足である。

たまたまノーベル平和賞が設定され、第一回授賞者（その時は平和賞だけが考えられていた）としてトルストイ自身が内定されているときき、自分には金銭が不要である。平和への実践をして、広くその情熱を湧き立たせたものの、ドウホボール教徒の如きはないから、ノーベル賞はこれに贈りたいと寄書したものの、その審査員が全く教徒のことを知らずして、埒があかず、トルストイの拒絶によって、折角のノーベル賞は立ち消えとなった。（それが復活したのは三年後で、今度は平和賞以外に科学賞、文学賞、医学賞などが付加された）

トルストイはその不足の巨額の費用を自分でつくろうと考えたのである。彼に最もたやすく多くの金をつくる手段は小説をかくこと以外にはない。しかし彼は数年前、いわゆる「コンツァッジオン転機」という深刻な人生的懷疑に直面し、一



ドウホポール教徒に関する著書

さいの生存の価値の徹底的な再吟味にかかると共に、芸術についても多くの疑惑をいだいた。

過去の諸大作、シェークスピアもゲーテも彼は否定したのである。小説で僅かに価値をみとめたのはユーゴーの「レ・ミゼラブル」、ドストエフスキイの「死人の家」や「罪と罰」、ディッケンズの二三作、ツルゲエネフの小品、ストウ夫人の「トム叔父の小屋」などに留まり、他の大部分の作は、トルストイ自身の作もふくめて、人生にとり無用有害の長物とみとめた。その結果、折角着手しかけていた「復活」もすぐ筆を折って、出来た書き出しのわずかばかりの原稿は、空しく筐底に藏していた。

トルストイは、それを完成して金をつくることを思ったが、雑誌「ニワ」に連載の約束を取りきめて、十年ぶりで、旧稿の塵をはらって、書きついで。云いかえれば、ドウホポール救済という問題がお

こらなかつたら、「復活」は永久に完成を見なかつたであろう。かねてから社会小説を提唱して、見解の狭い日本の小説家にたいする不満をぶちまけていた魯庵は、この点に多大の関心をあつめずにはおられなかつたのだ。そして「学燈」五月号には、次の挿話がのっている。

「復活」英訳の許可は世の知るとおり、エイルマア・モウド夫妻が得た。イギリスからロシアに移住し、トルストイ邸に出入りして、ロシア語の達者なところから厚き信用を博し、チェルトコフ、ビリニコフとならんでトルストイ門下の三銃士の如く重んぜられた。

訳するにあたって、トルストイは、その収益はドウホポール教徒に寄付すべきことを条件とした。モウドは、トルストイの意を受け、ドウホポール教徒が未知のカナダに移住する予備調査をし、入植地を三か所にきめ、そして自分が一しょについて行ってやった経歴もあるから、無論、それに異存のある筈なく、まず百五十ポンドの為替をおくると、思いがけないことに、彼等はそれを返還してきた。その言い分によると――

「じつは『レザレクシヨン』の中には甚だしき不穩の分子をふくんでいる。もちろんトルストイ伯の目的は不穩を教ゆるためでないのは明瞭であるが、世の俗物者流はこの書をよんでトルストイ伯の敬虔なる真面目に薫化されるよりは、却つてその不穩なる一部に誘惑さるるものが多いと信ずる。この故に『レザレクシヨン』が数多売れて利益があつたれば、その結果は取りも直さず恐るべき害毒を社会に流した事になる。わが教会では、斯くの如き汚れたる結果を来せし寄付金を受くるに忍びないから、トルストイ伯及び翻譯者の好意は感佩するが、寄付金だけはお返し申す」と。

芸術品であれば、如何なる猥褻も咎められずとする一部論者と真反対である。イタリヤの美学者クローチェも、春画が最高芸術の場合にはしばしばあると論じている。

エイルマア・モードは、あれほどドウホボールの面倒を見たのだが、後に疎遠になって、冷嘲憎悪の態度さえ示すに至り、トルストイがあれまでに肩を入れたのは、大きな買いかぶりだと云っているが、その発端が、この寄付金返還に気を悪くしたためかどうか。

じつは、この返金の話は、たいへん面白いのに、書冊となったモードの「ドウホボール研究」(A Peculiar People)をはじめ、その他の書冊にも書いてない。しかし魯庵がこうして「学燈」に紹介し、彼の従弟の宮田修も書いているところを見ると、当時の雑誌にでも現れた記事を、伝えたのであろうか。

九 英皇戴冠式

この年六月イギリスではエドワード七世新帝の戴冠式がおこなわれた。ヴィクトリヤ女王のイギリス商工業の繁栄の絶頂を劃したと云わるる治世、しかしながら飽き飽きする程長い治世が終ったので、この交替には全世界中から一種清新な期待がかけられた。

丸善は、この同盟国の大礼を慶祝し、画家結城素明の意匠した戴冠式祝賀カードを特製し、イギリス本国および英領の取引先書肆と関係ある向きに送った。六月二十九日のロンドン・タイムスは左の記事をかがけている。

「かつて目にしたことのない程美しさを極めた戴冠式カードが東京のZ・Pマルヤ株式会社からとどいた。

“Their most respectful congratulations on the Coronation of His Majesty King Edward the Seventh, with sincere wishes for the continued prosperity of the British Empire”と記されている。心からの答礼を送り、極東の島帝国と丸善株式会社の隆昌を祈り、併せて日英同盟の平和裡に永続し、且つ樂しき菊の国における吾等の友だちが、暇あれば、このまことに美麗なるカードが満足なる一例をなすような國際的友好を、更にたびたび垂るることを希望す」

元来、ロンドン・タイムスは自ら高く持するところあり、当時何人かの死がその社説において取りあつかわれれば以て世界的に最高の榮譽としたもので、日本では日露戦争の翌年、満洲軍の總參謀長兒玉源太郎大将の死まで、この榮譽にあずかった者がないと云われる。それほどにも誇りをもつ紙面が、一隅を、ささやかなカードのために割いたのは異例の事に属する。

こうしたことから關係がはぐれてきて、ブリタニカの共同販売についての提携を申しこまれる事になる。